

ルソーとカミュの、

晩年の追放下における内的体験について

五十野 昭 夫

十八世紀のジャン・ジャック・ルソーは、『ダランベールの手紙』（一七五八）によって、親友ディドロなどの「百科全書派」と訣別し、それに加えて祖国スイスのジュネーブ当局は一七六二年六月十九日、『エミール』と『社会契約論』の「焚書処分」とルソー逮捕の決定をおこなった。そこでルソーは祖国スイスからもフランスからも二重に追放され、しだいに「闇の仕業」からもたらされた孤独と迫害の中を生きるようになった。この苦境と絶望のさ中において、彼は自己の正当性を語る『対話』、ルソー、ジャン・ジャックを裁く『（以後『対話』と略記）』（一七七二―七六）を書き、その後

の一七七六年の秋頃から「孤独な散歩者の夢想」（以後『夢想』と略記）を執筆し始める。この『夢想』には『対話』の被害妄想や阿鼻叫喚に代わって、一種の静寂な落ち着きが出現するが、しかし次のようにルソーの孤独と苦悩はなまなましく表現されているのである。「こうして私は地上でたった一人になってしまった。〔…〕だれよりも人と親しみやすく人なっこの人間でありながら、万人一致の申し合わせで人間の仲間から追い出されてしまったのだ」（註下）。

このようにルソーは、この地上での孤独と社会からの追放に苦しみながら、しかもなおこの小論で次に見るように、祖国スイスの大地

との神秘的な触れ合い――つまり湖の揺れ動く水を媒介とした「恍惚」な内的体験を通して自己存在の確認と苦悩からの解放を成就するのである。

他方二十世紀のアルベール・カミュは『反抗的人間』（一九五〇）の刊行によって、雑誌「現代」に集うサルトルを中心とした「左翼」の人々と訣別し、同時に祖国アルジェリアの独立戦争の泥沼化の中でカミュなりの休戦を呼びかけたもののその挫折（一九五六年一月）などによって、さらに祖国アルジェリアからの激しい追放を感じるのであった。「最初は石しか住まぬこの稔りなき土地で、孤独と沈黙とがダリュには何ともつらかった。〔…〕これほど愛していたこの広い国に、彼はひとりぼっちでいた」（註下）。このようにダリュを通して自己告白するカミュは、フランスと祖国ジュネーブの両者から二重に閉め出され追放されたルソーと等しく、フランスと祖国アルジェリアの両者からこれ又二重に閉め出され追放されているのである。その上カミュはルソーの『対話』と同様に、あの『転落』の中で、同席するフランス人に向かって自己弁明を執拗に試みるのであった。そしてルソーは『夢想』の中で、ビエヌヌ湖の水を媒介とした神秘的な体験によって出自への自己解放を成就するので

あるが、追放のさ中であつたカミュも同様に、アルジェリアの砂漠を背景にした堡壘上での『恍惚』の体験によって自己解放を成就するのであつた。

ところでルソーの『夢想』とカミュの『追放と王国』とを比較して考察する場合にもちろん考慮に入れなければならないことは、ルソーが生きた十八世紀とカミュが生きた二十世紀の相異と落差であり、又同時にルソーが『夢想』を執筆したときの年齢とカミュが『追放と王国』を書き上げたときの年齢の差異でもあろう。前者の問題はとりあえずこの小論では省くとして、執筆当時のルソーは六十代の半ば(六四歳)でカミュは四十代(四四歳刊行)であり、したがつてそれぞれの作品における追放に対する闘いの姿勢も、ルソーには被害妄想はあるにせよ死をまじかにした一種の静謐さが宿るに對して、たとえカミュには画家ヨナに見られるように文学と連帯への敗北と無力を垣間見させるが、全体的に壮年期の激しい生の渦巻きが随所に見られるのである。この年齢の問題は、いわゆる文学的出発の遅かつたルソー(『学問芸術論』発表三八歳)と対蹠的に早かつたカミュ(『異邦人』刊行二七歳)とに根本的に由来する点でもあろう。したがつてこの年齢の問題からも、ルソーとカミュの人間像と作品の比較研究を考察しなければならぬのであるが、この小論ではルソーとカミュの孤独と追放のさ中の、自己出自への回帰と救済の問題にのみ絞りたいと思う。具体的にはルソーの『夢想』「第五散步」に見られるジュネーブのビエーヌ湖の水と触れ合う至福の内的体験と、カミュの『不貞の妻』ジャンニヌに見られるアルジェリアの砂漠を目的にした堡壘上での瞬間的な恍惚の内的体験とに限つて、若干の比較考察を試みたいと思う。

I

『對話』以降の孤独と追放のさ中のルソーは、この『夢想』の「第五散步」の中で、彼自らが「その島(ルサン・ピエール島)で暮らした二カ月」と呼んでいる一七六五年九月半ばから十月二五日(五三歳)までの過去の楽しい生活を次のように回想しているのである。「これまで私が住んだすべての場所の中で、『…』ビエーヌ湖のまん中にあるサン・ピエール島ほど、ほんとうに私を幸福にくれしかも深い愛情の念を心に残してくれたところはない」(註3)。

もちろんこのようにサン・ピエール島での過ぎ去つた生活を回想することによつて時間は過去へもどり、往時の幸福とその回想による現在の幸福とを同時に味わうのであるが、他方この場合のルソーのサン・ピエール島への願望は、ルソー自身の閉ざされた魂と同じように、ひとつの閉ざされた空間——島への願望と密接に結合しているのである。「モチエを右でおわれて、私が逃げ込んだのがこの島なのである。『…』不安な予感をいだいていた私は、この隠れ家を永久の牢獄として一生のあいだこれに閉じこめておいてもらえたら、『…』地上の存在を忘れ世間からもまた私の存在を忘れてもらえたら、とどんなに願っていたことだろう」(註4)。このようなルソーの、永久に隔絶した牢獄のように閉ざされた空間への好みについて、ジャン・スタロバンスキーは『新エロイズ』のクラランを例に引きながら次のように述べている。「アミエルがそのことをはっきりと指摘しているように、ルソーには島嶼性への願望、自己の生を島に閉じこめたい欲求があるのだ。そしてクラランはまさしく島であり、隠れ家であり、閉ざされた園であり、みずからが生みだした幸福にしっかりとめたれかかった小さな共同体でもある。それは

美しい魂の地上の避難所でもある。「……」クラランの集團の喜びは、ジャン・ジャックの孤獨な陶酔の重ね合わされたイメージにすぎない。クラランは閉ざされた世界ではあるが、そこで人々は「偉大な存在」への陶酔にみずからをゆだねているのである」(註5)。

ところでルソーがサン・ピエール島の頂きを降り、砂地のどこか隠れた休憩場所に行ってみると、あのクラランの自然への合体時の陶酔と同じような陶酔の喜びが、水の揺れ動きを媒介として成就されるのである。「夕方になると島の頂きを降り、このんで湖の岸辺に出て砂地のどこか隠れた休み場所に行つてすわる。ここでは波の響きと揺れ動く水面が私の官能をとらえ、心からいっさいの動揺を追い払つて甘美な夢にひきいられ、しばしば夜がやってくるのも気がつかないでいる。寄せては返す波の動き、とぎれなく続きながら間隔をおいてたかまる響きは、休みなく私の耳と目に触れて夢想に消えた内面の運動にかわり、考える努力をしないでも十分に私の存在を喜ばしく感じさせてくれる。ときどき生まれるこの世のはかなさについての漠然とした一時的な考えも、この湖水の波の動きを通してその姿が示されているのだ。しかしこれらのかすかな印象も、私を揺すぶっている一様な連続運動の中へ消え去るのである」(註6)。ここに垣間見られたルソーの自然との恍惚状態は、黄昏が消滅し暗闇夜をむかえようとする瞬間に生まれる。ルソーの官能が水面の波の揺れ動きとその響きに触れ合うと、彼の視線と聴覚はすぐに魅了され、それまでの不安な反省にみちた意識はこの波の様なリズムカルな運動と合体してそこに魂と自然との交感状態が生まれるのである。「こうした状態こそ私がサン・ピエール島において、あるいは水のまにまにただよわせておく舟の中に身をよこたえ

て、あるいは波立ちさわぐ湖の岸辺にすわって、またほかの美しい川のとおりや砂礫の上をさらさら流れる細流のかたわらで、孤獨な夢想にふけりながらしばしば経験した状態なのである」(註7)。

マルセル・レイモンは、このルソーの至福の体験において重要な役割をはたす水や湖について次のように述べている。「ルソーの水はあらゆる生命のつぎることない源泉であり貯水池であり、この水から植物はおのれの力を開花させるのだ。そしてここでは鳥たちが、透明で流動的な歌をうたっているように思われる。したがって水が象徴している夢想はたえず不安定で流動的であるが、しかしここでは思考とイマージュが浸透し合い鎖の環のようにつなぎ合わされるのだ」(註8)。さらにまた追放のさ中でありながら、ルソーが合体する水を湛えた湖は、次のように彼自身の愛の回帰にもつながつてゆくのである。「しかし『新エロイズ』のためにはどうしても湖水が必要なのだ。そこで結局私の心がそのほとりをさまよいつけていた一つの湖を選んだ。「……」それはずっと前からそこに住みたいと願っていた場所であり、しかも幸福が夢想化されると宿命的にその場所に限定されるのであった。そしてあのお母さんの生まれ故郷でもあるということも、とくにそこを選択する誘いともなったのである」(註9)。

II

ではここでルソーの内的体験に引き続いて、カミュの『追放と王国』の中の『不貞の妻』ジャンニヌの恍惚の体験を分析し、そこに二重映しにされている当時のカミュの、孤獨と迫害に苦悩する魂のありかたに耳を傾けたいと思う。

この『不貞の妻』の女主人公ジャンニヌは、アラビア人に直接織

物を販売する夫マルセルといっしょに、北アフリカ——多分アルジェリアに來ているのだが、激しい老いと疲労、さらに夫やアルジェリアからの過酷な追放と疎外とを感じているのだ。そしてジャンニヌは夫といっしょでも子供のいない孤独地獄の中であって、自由と回帰を求めあてもなく無限に町を彷徨している感情にとらわれている。そこで彼女は砂漠を見下ろす堡壘に登り、抑圧された感情からの解放の体験を、その堡壘の上で二度成就させるのだ。その一度目は夕方の黄昏の午後五時頃で、夫もジャンニヌの後について堡壘へと登ってゆくのであるが、その時妻が寒さに歯を鳴らしながら恍惚状態になっているのを見て「寒さのため、死んでしまうぞ。お前はばかだなあ。もう帰ろう」(註10)と言っただけであった。その後ジャンニヌは夫とホテルへ帰り、夫と床につくが彼女の魂の中には不安と絶望と死の恐怖がひたひたと押し寄せてきて全く寝入ることができなかつた。彼女は夫とその恐怖をわかち合うことによつて、その恐怖からの自己解放を試みようとしたが、夫はいつもと同じようにただ子供みたいに熟睡し彼女の苦悩を共有することはなかつたのである。このアルジェリアの激しく怒り狂う追放の下で、この夫の寝顔に心底から絶望したジャンニヌは、再び自由と解放の王国を求めて深夜のホテルを飛び出し堡壘の平屋根へと登ってゆくのだ。そして次のようにジャンニヌの神秘的恍惚の体験が成就されるのである。

「しかし、冷たい空気をぐいぐい飲み込むと、それはやがて彼女のうちを規則的に流れ、心細い温みが悪感の底から立ち昇ってきた。彼女の眼はやがて夜のひろがりに向かって見開かれた。〔…〕乾いて冷たい夜の厚みのなかで、幾千の星が小止みなく列を整えてい

た。そしてそのきらめく水塊は〔…〕いつの間にか地平のほうへ滑り出す。ジャンニヌは、この漂う火を眺めては、そこから身をひきかねていた。彼女はその火とともに旋回した。その場を動かさず、その火と同じ道をたどりながら、彼女はしだいに、その存在の最も深いところに結ばれていった。眼の前で、一つまた一つ星は落ち、やがては、砂漠の石の間に消え去った。そのたびごとに、ジャンニヌは少しずつ夜に向かって心を開いた。〔…〕もう慄えない体の中に改めて樹液が昇つて來た。〔…〕星座を形造る最後の星々が、その花房を低く砂漠の地平に落して、動かなくなつたそのとき、堪えがたい優しさをもって、夜の流れがジャンニヌを涵しはじめ、寒気を沈め、その存在の幽暗な中心から昇り、絶えざる波となつて、呻きに満ちるその口にまで溢れ出た。一瞬の後、空全体が、冷たい地上に倒れていた彼女の上に押しつぶされてきた」(註11)。

このように夫からもアルジェリアからも追放の身であるジャンニヌの恍惚の体験は、「骨まで削り取られた乾燥地帯」の砂漠を見下ろすじつに膚寒い堡壘の上で成就される。寒気のため体をふるわせていた彼女は、その冷たい空気をぐいぐいと飲み込み、そのリズムカルな流れと火と化した星の旋回に結ばれながら、この沈黙と孤独と化した大地の中に徐々に溶け込んでゆくのだ。そしてもちろんジャンニヌはここで、不在の夫に代わる胸壁に体を押し当て欲望を成就させるのであるが、外界の星々も最後には砂漠の地平線に飲み込まれて動かなくなる。いわばこうした一切の時空が停止した特権的瞬間にはじめて彼女は夜の流れと完全に溶け合つて合一し、孤独と追放下における自己解放——喪われた愛(Ⅱ王国)を瞬間的に奪還する体験がこの不毛な砂漠を背景に垣間見られるのである。

こうした砂漠とカミュの内的体験の深い係り合いを、ローラン・マイヨは『アルペール・カミュ、または砂漠の想像力』の中で縦横無尽に論じている。「砂漠のイマージュは、カミュの破壊と創造、愛と絶望の力を結び合わせているように思われる。砂漠は我々と無縁な土地でありながら途轍もない支配力を持ち、そこにはまり込むと転落の憂き目に会い、火傷と喉の渇きのため町は廢墟と化するのだ。しかも砂漠は、「…」画家ヨナの屋根裏部屋とカンバス、医師リユールの誠実、異邦人ムルソーの無関心、不貞の妻ジャンニヌの涙、「…」そのものなのである」(註12)。

さらにペーター・クリールは次のようにも説明している。「八胸壁が今や彼女の胸を押し下」というカミュの表現によってこの女主人公の受動性が強調されているのだ。「…」そして研究者がこのジャンニヌの体験と『結婚』のときのカミュの体験とを同一視すれば、多くの微妙な相異を無視し結局は誤りをおかすことになるのだ」(註13)。つまりカミュの初期作品『結婚』の中の自然への讃歌や合体の神秘的体験は、私(II)の視点から高圧的にしかも超越的に主張されているに対して、この『不貞の妻』の大地との神秘的な体験においては、私自身ではなくてジャンニヌという女性を通してしかも受動的にその体験が語りかけられているのである。もちろんこのカミュの青春期と壮年期における神秘的体験の相異は、若々しい情熱でアルジェリアから超越してフランス本国へ向かうカミュの姿と、第二次世界大戦後のアルジェリア紛争の泥沼化の中で受動的に押し流されていったカミュの姿との相違でもあるだろう。その上不在の夫に代わる胸壁によってのみ自己解放が成就されることは、壮年の孤独と追放のさ中であって、故国アルジェリアを虚無の体験に

おいてしか取りもどせなかったことを象徴しているとも考えられるのである。

III

すでにマルセル・レイモンによって、ルソーのサン・ピエール島での恍惚時における水の重要な役割を指摘しておいたが、ジャン・グルニエは、ルソーのフォリオ版『夢想』の序文で次のように述べている。「サン・ピエール島は砂漠ではない。管理人の家族がそこに住んでいるし、果物の木がそこに植えられている。家畜も育てられている。「…」この島は人里はなれているが、肥沃な土地なのである」(註14)。周知のようにこのグルニエは、カミュのアルジェリアのリセ以来の生涯の師であり、あの『孤島』の砂漠を中心とした神秘的な「肯定の瞬間」によって、カミュ自身の文学への決定的な影響と開眼とがなされたのである。そしてこのグルニエのルソーの作品への序文は、カミュ他界以前の一九五八年のものであるが、ここでルソー晩年の孤独と追放の『夢想』を論じるにあたり随所に湖と砂漠の重要性を比較検討しているのである。それゆえに、この「序文」ではカミュ自身の名が直接言及されていないにしても、当時迫害と追放に苦悩するカミュとそれを静かに見守る師グルニエの、両文学者の間にこだまする砂漠への愛の共鳴をここに聞かざるをえないのである。

ところでルソーの想像力の豊かさ、その爆発的な激しさは研究者の一致した見方で、ロベール・オスモンも次のように述べている。

「ルソーの夢想には「…」あらゆる幸福の記憶を喚起する力がある。

「…」つまり想像力の翼に乗って、夢想は現実よりもより美しい過去を再創造し、魅惑的なイマージュによって過去に感じとられた対象

を生き生きとさせるのである」(註5)。その上ハンソー自身『ハンソー』の中でも次のように述べている。「現実の世界には限界がある。しかし想像の世界は無限だ」(註6)。「他方カミューの『不貞の妻』のジャンニヌの「恍惚」の体験は、ヘーター・クリーンによって次のように説明されている。「かくしてここで問題をなされてはいるジャンニヌの体験は、神秘的な印象を与えるが、彼女は現実世界に密着して超越への飛躍を行わないのである。[...]なぜなら具体的世界を信頼することが、カミューにとって倫理的価値を与えるからである。[...]つまりこの小説の中で最も感嘆すべきことは、カミューが豊かな宗教的恍惚の状態を喚起することができたと同時に、この主人公ジャンニヌを、自己の本質としてみなしていた世界に誠実に置いたことである」(註7)。もともとこうしたハンソーの爆発的想像力や、カミューのより現実的な想像力の相違の問題は、十八世紀ハンソーの作家としての偉大な姿、あるいはしばしば言われている二十世紀カミューの想像力の貧困などの差異に還元できるのかもこれなご。しかしジャンニヌに見られる、喪われたいわば虚無の王国を神秘的恍惚の体験によって所有することが、現実社会とのより開かれた倫理的結合を深めていくことになるならば、ここにカミューの二十世紀で照射する人間と社会との豊かで稔りある立脚点を読みとることも可能であらう。

(註1) J.-J. Rousseau; *Oeuvres complètes I* ≪Bibliothèque de la Pléiade≫ 1976 (註1) Pléiade 版; Rousseau; O. C. I. による註記) *Les Rêveries du promeneur solitaire* (註1) *Les Rêveries* (註記) p. 995 (註1) つはこれらすべての邦訳を適宜使用した。また本文中の傍点(筆)は筆者が付けた。

(註2) Albert Camus; *Théâtre, récits, nouvelles* ≪Bibliothèque de la Pléiade≫ 1967 (註1) Camus; T (註記) L'Hôte, p. 1617, 1623

(註3) Rousseau; O. C. I. *Les Rêveries*, p. 1040

(註4) *ib.*, p. 1041

(註5) Jean Starobinski; *Jean-Jacques Rousseau — La transparence et l'obstacle*, Gallimard, 1971, p. 126-27

(註6) Rousseau; O. C. I. *Les Rêveries*, p. 1045

(註7) *ib.*, p. 1046-47

(註8) Marcel Raymond; *Vérité et poésie*, La Baconnière, 1964, p. 92

(註9) Rousseau; O. C. I. *Les Confessions*, p. 431

(註10) Camus; T. *La Femme adultère*, p. 1571

(註11) *ib.*, p. 1574-75

(註12) Laurent Mailhot; *Albert Camus ou l'imagination du désert*, Les Presses de l'Université de Montréal, 1973, p. 435

(註13) Peter Cryle; *L'Exil et le royaume d'Albert Camus*, *Lettres modernes*, 1973, p. 58

(註14) Jean Grenier; *Introduction dans «Les Rêveries du promeneur solitaire»* Collection Folio, Gallimard, 1972, p. 27

(註15) Robert Osmond; *Étude psychologique des «Rêveries»*, *Annales de la Société J.-J. Rousseau*, XXIII, 1934, p. 106

(註16) Rousseau; O. C. IV. *Emile*, p. 305

(註17) Peter Cryle; *L'Exil et le royaume d'Albert Camus*, *Lettres modernes*, 1973, p. 55